道の愛称から人の輪が広がった

美晴台の道に愛称をつける会

市営地下鉄ブルーライン上永谷駅から一kmほど離れた小高い丘の上にある戸建住宅地。美晴台は昭和三十五年頃に開発整備され、道路が碁盤目状になっているまちです。開発から半世紀がたち居住者は三世代目となり、地域では高齢化が進んでいます。

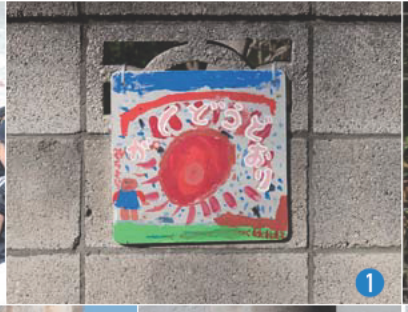
▲自治会館前にも子供たちのプライベートサインが

道の愛称が地域への愛着を育むきっかけに

美晴台自治会では平成二十四年から住民が安心して幸せに日々を送れるよう、また、住民同士が協力し助け合う地域づくりを目指し、地域のお年寄りを応援する「美晴台自治会助け合いグループ」を結成して、庭木の剪定や茶話会の開催などに取り組んできました。

活動を続ける中で、碁盤目状という道路の特徴から、依頼者の家の位置が分かりにくいなど、まちの課題が明らかになりました。例えば「〇〇番地のAさんの家、あるいは何組のBさんの家と、番地や組、名前を挙げても地域にお店などの目印もなく、伺うお宅がどこなのかメンバー同士でも認識できない。」というものです。

「道に愛称（名前）をつけたら場所が共有できて分かりやすくなる。」とお互いに思っていたところ、現・道の会代表の高森さんが「ヨコハマ市民まち普請事業」を知り、メンバーに紹介、早速「美晴台の道に愛称をつける会」を結成、美晴台の全ての道三十四本に愛称をつけ、愛称入りの案内板やサインなどを整備する提案で平成二十六年に応募しました。施設を建てるなど大がかりな整備提案の多いまち普請事業の中で目立ちづらいものでしたが、その着眼点が評価され、一次選考に見事残りました。



1 地域の子供たちが描いた「プライベートサイン」
2 地域のイベントでお絵かき会
3 美晴台の道に愛称をつける会の皆さん（ヒアリング当日出席者）
4 中学校と共同で制作したイラストマップ
5 美晴台のシンボルサイン 富士山・桜・笑顔

この段階からまちづくりコーディネーターが入り、活動のアドバイスを受け、住民の皆さんを巻き込む大切さを意識するようになりました。アンケートやワークショップで美晴台の好きなところや特徴からシンボルを定め、道の愛称を決めていき、二次コンテストで助成対象となりました。

平成二十七年春から整備に入り、さらに地域を巻き込んでの活動が始まりました。多くの子供により、「富士山」「桜」「笑顔」の大きなシンボル原画と、プライベートサインと呼ばれる家のフェンスなどに取付ける絵に道の愛称が入ったボードが「お絵かき会」で制作され、ファミリーやひまわりなど色鮮やかな二百枚以上ものサインがまちを飾りました。

整備終了後もさらに活動の輪が広がっています。道の愛称をヒントにお菓子のもらえる家を探し出すハロウィンイベントや、まちなかで消火器の設置場所を見つける防災意識向上の取組なども行っています。またプライベートサインは年に数回、新規制作や塗り替えの「お絵かき会」を開催しています。活動を継続することにより、新しい出会いやつながりが生まれる中で、一次選考当時の小学生が中学生となり、子供たちのサイン作りをお手伝いするボランティアとして活躍する姿もあります。道の愛称に親しみ、活用してもらうだけでなく、地域への愛着を育むきっかけにもなっています。

子供も大人も住んでいて楽しいまち

さまざまなイベントが地域の大人と子供、また新たに引っ越してきた新住民と以前から住む人々との交流するきっかけになり、民生委員を務めるメンバーの一人は、子育て中のお母さんから「子供向けの楽しいイベントが多く、地域にとても馴染みやすいまち。」との声も聞いたそうです。

住民同士のつながりが深まる中で、子供も大人も住んでいて楽しいまちとなり、「地域が連携、活性化してうまく回りだしている。」とメンバーの方は言っています。

ヨコハマ市民まち普請事業

地域の特性を生かしたハード整備に関する市民の皆さんからの提案を募集し、二回の公開コンテストで選考された提案に最大五百万円の整備助成金を交付します。市民の皆さんが主体となったまちづくりを支援することで、地域コミュニティが活性化されています。

公開コンテストの様子

▲ようこそ「さいえんサロン」へ

地域まちづくり活動事例

04

南　区

横浜・人・まち・デザイン賞

南区の西部に位置する六ツ川地区。住宅街の一角にある畑では、和気あいあいと農作業をしている人たちの姿があります。この畑を中心として、展開されているのが「六ツ川野外サロン」です。

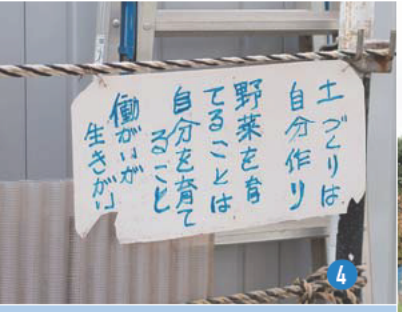
「土」でつながる

六ツ川野外サロン

お互いに「見守り合う」場が必要

六ツ川地区は山坂の多い丘陵地の開発によりできた町ですが、開発当時に比べ高齢化が進んでいます。見守りを必要とする高齢者が増えていく一方で、見守る側の役割を担う人手が足りなくなってきました。六ツ川地区連合自治会はこの状況を見直し、訪問による見守りだけでなく、みんなで外に出て顔を合わせることで、お互いに「見守り合う」場が必要だと考えました。そこで家に籠りがちな一人暮らしの男性高齢者が外に出るきかっけとなるよう考えられたのが、「農作業」でした。そして、農作業を通じて住民同士が交流できる、「野外サロン」を始めました。

参加メンバーを募集すると、多くの人たちの手が上がりました。農作業をしたい人、地域の人に野菜を振る舞いたい人、みんなとお茶をしながらおしゃべりしたい人…それぞれ動機を持つ人たちがサロンに集まり、交流が生まれました。まさに「見守り合う」



1 六ツ川野外サロンの皆さん
2 さいえんサロン
3 土を通じて「人」がつながります
4 「土づくりは自分作り」

関係が地域に構築されていったのです。

次々と活動が展開

「六ツ川野外サロン」では次々と活動が展開します。買い物に行くのが困難だという住民の声を聞き、畑で採れた野菜を公園などで販売する場を設け、さらに一人暮らしの高齢者のために配達サービスを行うなどの支援も始めました。同時に、「自分たちが畑で育てたおいしい野菜をみんなにも食べてもらうのが嬉しい。」といった、提供する喜びも生み出しています。

また、地元の小学校と連携した「農援隊」の活動にも取り組んでいます。これは学校給食の残飯を活用した肥料作りや農作業を通じて、小学生に土に触れる体験をしてもらうもので、学校と地域の交流の機会を作りました。さらに現在は、畑で採れた唐辛子を使った「六ツ川みそ」の販売等を通じて、地域の名前を知ってもらえるよう、六ツ川地区のPR活動にも力を入れています。

「楽しくなければ続かない」がモットー

「動員ではなく、参加したい人が参加できるときに作業をする。楽しくなければ活動は続かない。」と前連合自治会会長の東梅さん。このようなモットーもあってか、サロンの参加者には地域活動にも関心を持つようになり自治会長や青少年指導員になったメンバーもいるとのことです。担い手の一人ひとりに参画意識を持ってもらうこと、また、みんなが楽しめる場を作ることが、六ツ川地区のまちづくりの発展につながっています。

こうした「六ツ川野外サロン」と、そこから展開された多様な活動は、地域の魅力的なつながりを物語る活動として地域まちづくり推進委員会の表彰部会委員から高く評価され、平成二十九年に「第八回 横浜・人・まち・デザイン賞」を受賞しました。

横浜・人・まち・デザイン賞

横浜市内での地域まちづくりに関して特に著しい功績のあった活動や、都市景観の創造や保全に寄与したまちなみを構成する建築物等を表彰して、魅力あるまちづくりをより広く進めていくことを目的としています。「地域まちづくり部門」と「まちなみ景観部門」の二部門で実施しています。

支援者からの声

孤立した男性高齢者の見守りをねらって始めた農園活動は、皆でやる農作業を通して自主性や社会性等まで耕され、自治会長や青少年指導員などを引き受ける人材づくりにも有効なことが実証されました。2025年問題の取組モデルです。

まちづくりコーディネーター　内海　宏氏